

杉の柩に托されしもの
——『十二夜』のバラードの周辺（I）——

池上 賀英子

1 プレリュード

事の始まりは、Shakespeare の『十二夜』二幕四場の、singing fool に引き受けられて今に唄い継がれる〈that old and antique song〉に他ならなかった。昔昔、所は Illyria 国、この国の公爵は恋をしていた。



Come away, come away, death,
And in sad cypress let me be laid;
Fly away, fly away, death;
I am slain by a fair cruel maid.
My shroud of white, stuck all with yew,
O, prepare it!
My part of death, no one so true
Did share it. (II. iv. 52ff.)

來をれ、^{いまわ}最期よ、來をるなら、來をれ、
杉の柩に埋めてくりゃれ。
絶えよ、此息、絶えるなら、絶えろ、
むごいあの兒に殺されます。
縫うてたもれよ白かたびらを、
縫ひ目縫ひ目に^{いぢい}水松を挿して。
又とあるまい此思ひ死。

(坪内逍遙訳)

哀切にして物狂おしいこの叶わない恋の嘆きの、翻れば人の世の無上のロマンティズムは、ノスタルジーの甘美さに似て、多種の言語に翻訳され共感された¹⁾。われらも逍遙訳を得て、日本語の馥郁とした絵画的文脈で解釈された、抒情の機微を実感することが出来る。Shakespeare 自らもその普遍性を恋の当事者である Orsino の口から評釈している——「おい、シザーリオー、聴いてろ、古い、平凡な歌だ。日向ぼこりをして、糸を紡いだり、骨の針で物を編んだりする苦勞知らずの村娘どもが歌う歌だ。」²⁾ と背景を色付けている悠久性を指摘する、「大昔らしく、いかにも暢気に、たわいもないことをいっている間に、無邪気な戀の眞實が見える。」³⁾ と結んでいる。

〈無邪気な恋の眞實〉は、後代、Christie 女史をして、そのリズムの滴りをサスペンスという冷静な意識的構築の中に解体し、感動を一言のシンボリック・タイトル⁴⁾ に^{しる}徴して静かに口を閉ざさせた。

Orsino
 Viola-Ceasario  Olivia という、循環して帰結を得ない love の完璧な
 トライアングル
 三角形を成す力学的構図は、Christie によって  という、
 図形としての明確な帰属性を予断し得ない、点と線という極めて不安定な要素
 エレメンツ
 に、解体された。

啓蒙されたルネッサンスの知性が仮借無く認識する、realism の鏡が痛烈に映し出す矛盾や曖昧性等、この世の個々の脆弱な正体は、夢、希望、願いなどという romanticism によって Shakespeare の懐深く包まれていた。Viola-Ceasario という表相的兎角の Errors は Viola=Ceasario=Sebastian という、そのままで許容的オプティミズムによって輕輕と happy ending へ称揚されていく。愛の構図はその力学的不動性を終始変えることの無いままに、観客の感性は擾乱されることは決して無い。総ては Comedy の〈落ち着き〉の下であった。

Orsino の Olivia への恋は実は ^{宮廷愛} courtly love を評定すべく愛の系譜へ提出された余儀無い論題であったし、Olivia 姫は Orsino に対峙する限り Petrarchism の Fair and cruel Lady の約定を遵法する〈むごいあの兒〉だ。

杉の柩に托されしもの

Orsino は仮想の愛に焦燥する元より Knight の役柄として〈Love^愛の法廷〉へと臨んだ。男装の下に熱い想いを隠して献身する Viola の Orsino への愛は、Romance 劇の heroine たちへと発展していく正しく〈Innocence of Love〉のアレゴリーの如き純情として、ひたすら描かれている。Viola の男性としての appearance の下の眩い女性としての reality が知覚され感嘆されたように、Orsino を試金石として問われた Love のテーマは、その認識が深められ〈愛の真実〉が賛美される、Pageant であった。

一方、Christie に受け継がれた時〈愛の^{シチュエーション}場〉は極めて曖昧で不確かに設定されていた。Rodie と Elinor との間の〈love〉の真相は、共有した幼少の頃の遊びであった〈バラ戦争〉へとその記憶は手繰られ確かめられていく。〈愛〉はバラの花に喩えられ、Rodie は白バラのヨーク家の側であり、Elinor は紅バラを紋章とするランカスター家の味方であった。〈本当のバラではなく、匂いもありはしない〉⁵⁾白バラは Rodie の Elinor への愛についてであり、愛の王道では無い冷ややかなそれであった。一方〈大きくて濃い色の、ヴェルベットのような花卉の、夏の香がする〉⁶⁾紅バラは、Elinor から Rodie への、心血で色付けられた炎のような大輪の愛を象徴している。「私たちがバカみたいに言い合いをしました。その事が急に心に蘇って来たんです。」⁷⁾と続けて、Elinor 自身に二人の愛の訣別の行方を直観させる。加えて Elinor の名前の由来を Henry II 世の妃であった〈Eleanor of Aquitaine〉に重ね合わせ、夫の情人であった Rosamund を毒を以って自決せしめた、愛への^{インテグリティ}完璧性に直進した女性の運命をも浮上させる。Rodie の愛は Mary Gerrard の可視的に輝くところへ目眩く走行していたのだが。

Orsino↔Rodie, Viola↔Elinor, Olivia↔Mary と相関し、相似形を髣髴とさせながらも Christie では、その一辺を欠く故に一触にして不安に曝され危機へと到る常道は、易易と予測される。Mary Gerrard が殺された。

単純で、陽気で、卒直で、明確だった〈昔昔〉の純情は、〈今〉に到り、複雑で、深刻で、曲折した、曖昧な〈愛の様相〉に変えられていた。万感を解する詩人の杖の〈優しい一振〉では解決は期待される可くも無かった。実線で繋

がれていたと思われた <love> は断ち切れ点となり、分解して虚空を彷徨って行く。

アキテインのエレノアが夫の情人を死へ到らせ <愛の Innocence> に殉じたように、<Elinor> は再び愛する人の恋人を死を似って裁いたか？ Christie が女性としての共感の丈を『杉の柩』という題に托して、読み取った、『十二夜』のソングの意味とは何か？

2 Sad Cypress

<Cypress>は Shakespeare の全作品の中で六箇所で言及されている。Schmidt は Lexicon⁸⁾ に於いてそれらを三種類に分類し説明している。①the tree Cupressus 即ち、樹木としての cypress 及びその材質を利用して作られた chests 等木工品として。②Emblem of mourning——即ち、the tree Cupressus が何時しか人間の death と関を持ち、人間達の死及び死者への嘆きや哀しみを托され、その喪章となってしまった。事実墓地に植えられる樹である。③Cypress (O. Edd.) or Cyprus (some M. Edd.) という spelling で著わされる Cyprus lawn 即ち、薄地の布である crape として。殊『十二夜』に於いても、三幕一場 123 行では純然たる crape としての意味を示す cypress であるが、二幕四場のこの song の中で意味するものは、Schmidt は喪の象徴としての範疇に入れながらも具体的指示物に関しての説明を加えている——a cypress coffin, or cypress branches laid in the coffin; according to some it means here 'crape'.

三種の判別は、Malone の結語するところ⁹⁾、context で選定する以外には無いが、大方は、'a coffin of cypress wood' を選んでいる。Arden 版の Craik も具体物の可能性^{プロバビリティー}としては coffin を第一としている¹⁰⁾。D. Wilson も Aldis Wright の解釈の内の 'either a coffin wood or a bier strewn with branches or garlands of cypress' を Cambridge 版の Notes で引用している¹¹⁾。Variorum 版で Furness は、Mr. Warton を主としての

杉の柩に托されしもの

crape 説を紹介しながらその不適性をも示唆して行く。‘crape’ 即ち ‘a shroud of cypress’ と解釈すれば三行後の my shroud of white と修辭的に重複する。それを許容しても、その経帷子は Polonius と同じく ‘white one’ となり in sad cypress の ‘sad’ と色彩的矛盾を生じる¹²⁾、と Cypress-coffin 説へ帰納させていく。

今日では日本語に訳された場合も、逍遙訳に拠る〈杉の柩〉という言葉の源流として、その意味するものは ‘coffin’ として解釈されている。そして Christie の *Sad Cypress* も、日本語版に於いてはその巻頭詩が逍遙訳の引用である処からであろうが、『杉の柩』と命名され落着している様子だ。

3 Cypress と Mourning-Emblem

さて当の ^{イトスギ}Cypress (=Cupressus) であるが、南欧を中心にしてヨーロッパに一般化している。正確には *Cupressus Sempervirens* (和名、セイヨウヒノキ) と呼ばれている針葉樹の種類である。論旨を進める前に *Britannica* 等の植物辞典系統¹³⁾に拠って ‘Cypress’ の植物学的情報を識っておく必要がある。

B. C. 1100年頃、Western Asia からその野生の原木が Cyprus に植民したフェニキア人に依って伝えられ、地中海沿岸地域へと広がって行った。乾燥した深い砂質土壌の低地で風通しの良い物陰に最も良く成長し、天然では 70~90 ft. にもなる。十六世紀半以前には England に定着していた。イギリスの気候風土では、南部に於いても 40 ft. 程に停まり、南欧の $\frac{1}{3}$ 程の成長率となっていた。木質は固く、木目が詰んでいて、しかも赤味を帯びた美しい色合いで耐久性に富んでいるので、古代より、建築材、船材、家具、容器などの生活の場に於いて重宝された。艶のある緑色の針葉で被われる先細の枝振りには炎の形に似ている。葉は年を経るごとに濃さを増し、最後には〈黒〉に近くなる。陰翳を放ち近づくことを否ませる一方、堂々とした雄姿を湛える。最古木は Lombardy の Somma にある高さ 121ft. 周 23ft. の糸杉で、Julius Caesar

の昔に既に成木であり、その生命の崇高な威厳の故に、Napoleon ですらアルプスの Simplon の山道を開いた時この木は切らせなかった、との事である。

以上のように、それが Cyprus に伝来した時は、この島民によって土着の女神 Beroth の化身として崇拜されていた Cypress が、大きく時を経、England へと飛来しその植物的繁殖の分布図を拡張して以来、次第に Emblem of mourning へと変質していく。その過程は一瞥し納得を得なければならない。十六世紀半頃迄には風景の中に定住し文学上に登場することになった Cypress は、先ず、詩人 Chaucer によって¹⁴⁾三箇所で描かれている。 *Cantabery Tales* の ①The Tale of Sir Thopas (l. 170) の中では 'His spere was of fine cipres.' と生活上の存在物として。②The Romaunt of Rose (l. 1376) では 'Olivee' の樹等と共に庭の立木としての存在。③The Parlement of Foules (l. 179) の中では、'the cipres, deth to pleyne' 死を嘆くサイプラスと。即ち $\frac{1}{3}$ で〈mourning〉としての概念的存在が述べられている。Chaucer らしく、cypress も、ナチュラルな存在としてそのままに捉えていた様に思われる。

Sidney に於いて¹⁵⁾も、cypress は、その多義的存在の全体として捉えられている。Symbol of mourning としては *Arcadia*, 1st Eclogue の l.119 で 'Cypress promyseth help, but help, which comes no recomfort.' Eclogue の常として、叶わない恋の想いを辺の木木の象徴する意味に托して歌い上げている。

Shakespeare に先立つ Elizabeth 朝の詩人である Spenser に到る時、Cypress は、現実の場面での存在よりも、詩的命運を^{しる}徴されている。*Faerie Queene* と *The Shephardes Calender* の二箇所¹⁶⁾で描かれた時、前者では〈sad〉後者では〈baleful〉という^{嘆き}〈mourning〉に限定させる形容詞が冠されている。*The Shephardes Calender* の November Eclogue の l. 145 での 'baleful boughes of Cypres' は、羊を愛した娘を悼んで、いつもはその娘の花冠のためオリーブの枝を挿頭した水の精たちが、〈今は悲しい糸杉を差し出す〉。死の悲しみに捧げる哀悼の^{しるし}章であり十一月の曆に似合う蕭条と

杉の柩に托されしもの

した牧歌的風景として描かれている。*Faerie Queene*¹⁷⁾ の中では、更に具体的に、死と密着した場面で描かれている。

So both agree their bodies to engraue;
The great earthes wombe they open to the sky,
And with sad Cypresse seemly it embraue;
They couering with a clod their closed eye,
They lay therein those corses tenderly,
And bid them sleepe in euerlasting peace. (II. I. 1x.)

「死は人間への平等の^{さだ}定めであり、共通の休息の宿である。墓のない人は休息もない、葬ってもらえないほど、死後の大きな恥辱はない。」¹⁸⁾とサー・ガイアソンは述べ案内の巡礼老人と二人して、悲運な夫婦の死体に埋葬を手向けた。まず地面を掘り起こし、墓穴を開ける。そして〈悲しみの糸杉の木で立派に飾り〉、死者の目を土で覆い、死体の中に納めて安らかな永眠を祈った。

coffin の中に cypress branches を敷き詰めたり、棺台を cypress branches や cypress garlands で鏤める、cypress の葬送でのフォーマリティーと同様に、もっと素朴に〈掘った墓穴の中を cypress の branches で飾った〉と考えられる。この行に付けられた Notes の中で、Upton は *Aeneid* Book III, 64 を引用し、これは古代の習慣に則った作法であり、この後の詩行で行なわれる、〈死者達の髪を切り、二人の血と土をつけて墓に投げ込み、敬虔な誓をたてる〉素朴な儀式も合わせ 〈Antiquity〉の色合を帯びた表現である、と示唆している。Kitchin も、Sidney の *Arcadia* の中で cypress branches が言及されており、古代では墓をそれで飾ることが習慣であったと¹⁹⁾。

この Notes で注目すべきは、墓を cypress で飾るのは the custom of Antiquity であり、その Antiquity として古代ローマの詩人 Virgil の *Aeneid* が揚げられている事である。*Aeneid* に著われる cypress については後で具体的に検討するが、一先ずこの結論として——*Aeneid* のこの部分の原文〈atrague cupresso〉は Loeb 版の H. Fairclough²⁰⁾ では、原語の意味に近づける可く 'with black cypress' と訳されている。Everyman 版の M.

Oakley²¹⁾ は '*mournful with ... and dark cypress*' とその文意を深めていた。Dryden 訳²²⁾に到っては '*with baleful cypress*' と、最早色彩を表わす形容詞は消され、Spenser と同じく、〈悲しみの cypress〉とその意味するところが強調されている。視点を逆行させるなら、cypress が baleful という形容詞でその本来の存在を制限されてしまう。〈Cupresso〉が〈Cypress〉と英語に移し替えられた時、England の文化の中で〈baleful〉〈sad〉という言葉の文脈に向かつて、Cypress の命運も定まってしまう。Dryden に於いてはそれは〈baleful〉以外の〈存在〉ではなかったということであろう。

少し先を急いでしまったが、——〈cypress〉が Spenser から Shakespeare に到った時、〈sad cypress〉として引き渡された。『十二夜』の song に現われた時〈sad cypress〉は、〈悲しみの糸杉〉では無く〈杉の柩〉を指していた。Furness は cypress-coffin 説へと結論づける時、〈sad〉との必然性をも素より道理づけなければならなかった。

Coffin being frequently made of cypress wood (perhaps in consequence of cypress being used at funerals) the epithet 'sad' is here employed with strict propriety.²³⁾

〈sad cypress〉は、その alliteration に因る修辭的密着性は元より、coffin に対する strict propriety であると前置きした後、その重要な機縁として——嘗て Richard II が、Robert de Vere の葬送の際に、友の遺体が納められている〈the coffin of cipres〉を開かせ顔にその手で触れながら〈哀切な〉^{わかれ}永訣を惜しんだ、という出来事の記録を引用し²⁴⁾、その epithet で在り得可き歴史的裏打を加えている。又、Cypress が Cyprus lawn 即ち crape を意味している場合に於いてもその歴史的変化は注目に値する²⁵⁾。Richard II の宝物品目の中にも記され、Drapery-List の中で記録されている '*cloth of gold of Cyprus*' '*satin of Cyprus*' 等として歴史上に登場する本来華やかな舶来の布地が、やがて〈黒い〉ribbon や hatband として funeral rite に加わり終には死者の纏う黒または白の〈shroud〉に定まった時、布地としての cypress も、このように、死に対する〈喪〉と一層に距離を密にした存在

へと時を経て行く。

Spenser からそっくり受け取った〈sad cypress〉は、Shakespeare に於いては、形容詞によって Mourning に限定されていたのでは無く、〈sad〉は cypress の epithet として従属し〈cypress〉自身が幾重にも〈喪〉に密着した存在物として決定済みになっていた。Lyly の *Euphues*²⁶⁾ を同時代的解釈の総論とすれば——Cypress は、神に呪われた無花果の木のように、美しく見事に葉は繁れど実を結ばない。繁茂を期して枝を切り払われれば忽ち死滅に向かい、成長を願って放水されれば衰弱していく。Erasmus 等のラテン語の類似の比喩を下敷にししながら、樹木の本性にそぐわない性質の故に、頑ななディスポジションの教訓とされている。Cypress は〈gloomy〉で〈不吉な木〉としての修辭的結論が下された。

Shakespeare から更に十七、十八、十九世紀へと cypress は今に向かって時代を進む時、本来の〈樹〉が体現している有機的な存在のダイナミズムは〈嘆きの Emblem〉へと無機的変質をしていく。勝利の〈歓喜〉に対する滅亡への〈悲嘆〉を、〈光〉に対する〈陰〉を、〈色彩〉に対して〈明暗〉を表象する樹となる。Cyprus lawn も又、瞑想の詩人 Milton の筆が重ねられる時²⁷⁾〈shroud〉の意味の重みが、薄布に織り込まれていく。悲しみ、敗北、死、不幸をも合わせて、完全に〈dark〉な世界の Negative な存在の〈Symbol〉へと、その深刻さを増していく。

4 Cypress と Death

イタリアの風景に於いては不可欠の風物である Cypress は、ブリテン島では囲みとしての低い灌木を仕切る箱庭の立木と変遷している。風土の繁殖への不適格性という実情と相関して、cypress はイギリスに於いて完全に Image としての存在を固めていくことになるのは蓋しの条理である。時を経て葬送の一般に、coffin として funeral branches として〈cypress〉がその存在を留めているのは、‘the custom of antiquity’であったとのことだ。‘the

pangs of despised love' の苦しさに〈杉の柩〉を哀切する例の dirge も、'old and antique song' であった。地中海域へ進行した cypress は古代ローマ世界に於いて一層にその気候風土を得て繁殖し広がり、〈死者の葬送の木〉として生活の場に存在を占めていたその習慣も、分布図を広げていったようだ。〈sad cypress〉は〈cypress coffin〉とその詩的文脈が決定済となった今、image の本体を成す cypress そのものに意味を問わなければならないだろう。

Virgil の *Aeneid* に現われる cypress は、樹木として五穀の女神 Ceres の神木²⁸⁾として又 Jupiter と Diana の聖林²⁹⁾として描かれている一方で、Spenser に復元された葬送の場面の必需として登場する。Priam 王の悲運の子〈Polydorus の埋葬〉の際、先ず大きな土の塚をたて、その前に祭壇をたて、この祭壇を黒いリボンと〈黒黒としたサイプラスの枝で厳かに飾る〉³⁰⁾。その周をトロイの女たちが髪を解き肩に流して立ち尽くす。又、〈Misenus の死〉に対しては、トロイの仲間たちはまず嘆き、遺体に別れの礼を尽くす。そして、松と榿を薪として積み上げて大きな火葬の壇を築き〈前面に葬送の木のサイプラスを据える〉³¹⁾。亡骸を整えて棺に横たえ、壇に上げて火葬をする。〈Cypress〉の存在と意味を Virgil に拠って手探りすれば——Homer を軸とした Epic Cycle の跡を受け、Ilion 落城後からローマ建国へ向かっていくトロイの叙事詩が、大きく時代を経て *Aeneid* として詩い継がれた時、英雄たちの〈死〉への葬送の儀式的の習いに変化が見受けられた。

Homer に於いてはギリシア・トロイの勇者達の〈死〉は、ひたすら素朴に号泣によって哀悼され鎮魂を得、榿を薪として火葬され、塚が築かれる。殊 Patroclus の葬送の際には、Achilles の主唱によってそれらの後、勇壮な葬送の戦車の競技会が催され哀悼が延長された。非業の友の死は、精一杯の慟哭こそが死者への最善の礼であったようだ³²⁾。そして、Patroclus の遺体は哀悼者たちの切り取った髪の手束で埋められた³³⁾。絶叫で魂を鎮めた後分身として随行する哀悼者の髪束が、Virgil に到った時、祭壇に立てられる cypress に変化して惣てが托されたのではなかろうか。

杉の柩に托されしもの

Cypress の〈喪〉としての真相は Ovid によって十全に美しく語り明かされる。Ovid は cypress を Apollo 神に愛された美少年 ^{キパリッスス}Cyparissus の転身とした。Cyparissus は、最愛の美しい大鹿を自らの投槍で誤って刺し、瀕死に苦しむ鹿を目にして〈永遠に悲しみ続けること〉を神神に懇願した。

そのうちに、とどめなき涙のために血が潤れはてると、手足が緑のいろに変わりはじめた。そして、いままで雪のような額にたれていた髪の毛は、こわい毛になり、そのまま硬くなって、先のとがった形をして星のきらめく天空を仰ぎみた。ポエプスは、これを悲しんで、こう言った「わたしは、いつまでもおまえのために泣こう。おまえは、ほかの人びとのために泣き、また、悲しむ人たちに仕えるがよい。」³⁴⁾

このようにして Cypress は死者への哀悼の化身となった。更に下った時代に於いて葬送に際し、cypress の小枝を柩の中に入れたり、棺台の上を飾ったりして、人々の嘆きの総てを糸杉に転身した Cyparissus に托することになる。トルコでは、*Britannica* の記す処では、死者一人に対して cypress 一本が傍に植樹された³⁵⁾。〈In sad cypress〉とは正しく〈Cyparissus の嘆きの姿〉であり——叶わない恋故に死よ来たれ、死して猶愛する人に燦がれ続ける、私も〈永遠に嘆きのキパリッスス〉にならん！ 古代ローマに於いて〈cypress〉は、主として葬送という現実の場に於ける〈悲嘆の祭式〉の中で、象徴的存在としてその意味を占めていたと言える。

しかし加えて、Frazer によって偉大な *The Golden Bough* の中で丹念に論証されている、原始宗教として重要な〈The Worship of Trees〉という古代人の哲理をここで踏襲する時、〈cypress〉は再その存在の意味を深めていく。「古代ギリシアとイタリアで樹木崇拝が盛んに行なわれていたことを示す証拠は幾らでもある」³⁶⁾ と述べ、その実例の一つとして〈Cos の Aesculapius ではイトスギを切り倒すことを禁じた〉³⁷⁾ 事実が挙げられている。樹木には〈精霊〉が宿っていると信じられ、時にはその精霊となっているのは

〈死んだ人の靈魂〉であるとされる。Frazer に拠れば——朝鮮では悲運に死んだ人間の魂は必ず樹木に宿ると信じられていた。又中国では太古からの習慣として、死者の靈を強めて遺骸を腐朽させないために、墓の上に常緑樹であるイトスギか松をその強い生命力の故に好んで植える。時として墓の上に繁った樹は、死者の靈と同一視された³⁸⁾。枝を折れば腕が折れ、切れば血が流れ出る。樹を切り倒すことは禁じられ、切り倒せば禍が降り懸ると伝えられていく。様様な形での〈樹木崇拜〉は日常の必死の儀式であった。Aeneid に於いても例の〈Polydorus 埋葬〉の場面に先出つところで——トロイから落ち延びた Aeneius 一行が、前途の神託を受けるため祭壇を築き、それを飾る葉の茂った枝を求めて一本を根刮にした時、その木から黒血が瀝り落ちた。又別の木の枝を取ろうとすれば、樹皮から黒い血が流れ出た。そして、槍の柄から生えている木を抜こうとした時〈木の下の方の底から泣くような嘆きの声が聞こえて来た〉——トラキーアの養父に裏切られ刺し殺されたまま野晒しになっていた Polydorus の亡骸だった³⁹⁾。更に、古代ローマの大母神キュベレに愛されたアッティスは松に変身し、現存しているアッティス像の中には頭部から松が生えているものもある⁴⁰⁾。このように、死者の魂が樹木靈となると信じられその意味を持つ、〈樹木崇拜〉という文化人類学的文脈で cypress を捉える時、イトスギは、死者を嘆く者の変身では無く、死者の靈魂の宿るものであり、〈死者そのものの化身〉と解釈されることになる。

Cypress は、実際の葬送の儀式に於いて〈喪の象徴〉として〈死の近親〉であったと同時に、樹木崇拜の対象として〈死者の魂を宿す樹〉として、正しく、〈Death〉そのものであった。Horace の Ode では Cypress は〈忌まわしい死者の樹〉⁴¹⁾と表現されている。事実 cypress は当時 Pluto と Proserpine の神木とされ、通常死者の家の前に死の標として置かれた。funeral-pile ともされた cypress は、その植物的繁茂と相乗し古代ローマに於いて、〈Funeral-Tree〉としての〈決定的習慣〉であった。

杉の柩に托されしもの

5 インターリュード

Cypress-coffin は死者に繋がり、Cypress-branches は喪者に繋がり——
〈sad cypress〉の意味を求めて古代ローマに到った時、cypress は〈死〉
の意味を全托されていた〈死の樹〉であった。然しながら更に辿り行く昔、
cypress-coffin は、死神の独占支配する処では無く、〈蘇生〉の悲願で秘めら
れた〈ミイラの棺〉⁴²⁾であった。

確かに、Elinor の Rodie への長く苦しい一つの愛の形は悲恋として亡び
Cypress-coffin に納められ埋葬された。Orsino の Olivia 姫への不毛の恋は
死神によって刈り取られる可き筈のものだ。〈sad cypress〉は、二つの悲し
い恋の形骸を納めて死へと葬り去った。

Cypress は、その木質の故に、棺のみならず神像など例えば600年も完全さ
を保った Jupiter の像や1100年も持ちこたえたローマの St. Peter's の扉な
ど事実久しく堪え得たように、靈魂の〈不滅〉を信じた 〈mummy cases〉
でもあった。〈cypress〉は、〈死〉に直結した symbol としての一般的認識
に停まる可きものでは無く、樹木には明確に顕現され生命の繁殖には必然の自
然の掟である、〈生〉に回帰すべき〈死〉、としての認識こそがその本道であ
った。Vincent Van Goch が〈向日葵〉から〈糸杉〉へ、対象の形も色彩も
変節を辿り、その延長線上に行き着いて遺した『刈り人』は〈死神〉としての
常識を重ねて、生命の循環と存続に不可避の、年毎に来たる可き〈刈り人〉で
あった。実のりに到った人間という生の麦穂に呵責なく大鎌を揮う死神は、実
は、〈太陽と共に白日の下を堂堂と王道を歩んで行く〉⁴³⁾〈刈り人〉である筈
だと Goch は看破している。

Frazer が解き明かした樹木と人間の生と死の本源の暗い密儀は、見者 Goch
によっても見事に覚醒されていた。〈死の樹〉糸杉は、書簡集に於いて〈緊密
に氣息を整えて屹立しているオベリスク〉⁴⁴⁾として感動されている。〈刈り
人〉は〈自然という偉大な本の語る死の影像であり、微笑している死だ〉⁴⁵⁾と

破顔している。〈生〉はその真相に於いて見詰められた時、〈向日葵〉では最早捉え切れず、地獄巡りは余儀無い。Goch の眼に生の本源は〈糸杉〉として映え、大地からうねりながら円錐状に天翔して行くもの。生命の色は〈向日葵〉の太陽に照射する輝では無く、焰の限り無く黒い、〈鈍色^{トビいろ}〉として認識されるに到った。Frazer を Dante に対する Virgil の精霊のように師とし、古代ローマから暗い cypress の死の樹林を通り抜け、更に遠く、cypress の源流の地、古代ギリシアの昔へと。即ち〈Homer, Hesiod, Theocritus の世界〉へと辿って行った時、cypress に托されて〈死〉と〈生〉が重なり合っていく。〈死の樹〉と思えた cypress は〈生命を誇る、香しい、常緑の巨木〉であった。

〈死〉の本姿を求めて〈生〉に到った時、悲恋として死滅し埋葬された cypress-coffin の中からひたむきに〈冬〉を堪えた Peter Load の Elinor への優しい愛が〈春〉に甦る。中から Orsino への Viola の純愛が新生する。Cypress-coffin は〈蘇生〉の棺であり、〈杉の柩^{サツド・サイプラス}〉は〈ressurrection〉の、即ち、〈再生〉への祈りが生命の限りに脈脈として秘められていた、と結論づけられることになる。

〈つづく〉

[テキスト]

- 1) J. D. Wilson (ed.): *Twelfth Night, The New Cambridge Shakespeare*, Cambridge, 1930.
- 2) J. D. Lothian and T. W. Craik (ed.): *Twelfth Night, The Arden Shakespeare*, London, 1985.
- 3) H. H. Furness (ed.): *Twelfth Night, A New Variorum*, New York, 1966.
- 4) Toshiko Oyama (ed.): *Twelfth Night*, Shinozaki English Classics, Tokyo, 1956.

本文中訳出しました「十二夜」は坪内逍遙訳『シェークスピア全集』（創元社、1952年）からの引用です。

[註]

- 1) Furness (ed.): op. cit., pp. 413-418.

杉の柩に托されしもの

- 2) Tw. II. iv. 44-47.
- 3) *ibid.*, 44-49.
- 4) Agatha Christie: *Sad Cypress*, Fontana Paperbacks, 1987. (恩地三保子訳『杉の柩』, 早川書房, 1987年)
- 5) *ibid.*, p. 137.
- 6) *ibid.*
- 7) *ibid.*
- 8) Schmidt: *Shakespeare Lexicon*, 2 vols. 以降の論旨中の Schmidt からの引用部に関しては, *Lexicon*, Vol. I. の *Cypress* の項を参照。
- 9) Furness (ed.): *op. cit.*, see Note 61. on pp. 143-144.
- 10) Lothian and Craik (ed.): *op. cit.*, see Note 52. on p. 58.
- 11) Wilson (ed.): *op. cit.*, see Note 52. on p. 135.
- 12) Furness (ed.): *op. cit.*, see Note 61. on p. 144.
- 13) *Cypress* に関する植物辞典系統の参考文献
 - ① *The Encyclopaedia Britannica*, Vol. IV., Chicago, 1961, p. 693.
 - ② Ad de Vries: *Dictionary of Symbols and Imagery*, London, 1984, p. 125.
 - ③ J. E. Cirlot: *A Dictionary of Symbols*, London, 1967, p. 72.
 - ④ *Oxford English Dictionary*, see *Cypress*¹, *Cypress*² and *Cypress*³.
 - ⑤ 加藤憲市『英米文学植物民俗誌』, 富山房, 1984年, pp. 149-151.
 - ⑥ C. M. スキナー (垂水雄二・福屋正雄訳) 『花の神話と伝説』, 八坂書房, 1985年, pp. 113-114.
- 14) Walter Skeat (ed.): *Chaucer: Complete Works*, Oxford Univ. Press, 1967.
- 15) Albert Feuillerat (ed.): *The Prose Works of Sir Philip Sidney*, Vol. IV.
- 16) Greenlaw, Padelford, Osgood and Heffner (ed.): *The Works of Edmund Spenser, A Variorum Edition*, Vol. VII., John Hopkins Press, 1966. See *Cypresse* in the Glossery on p. 113.
- 17) *ibid.*, Vol. I.
- 18) *ibid.*, II. I. 1x.
- 19) *ibid.*, see the Commentary of 1x. 3.
- 20) H. R. Fairclough (tr.): *Virgil*, 2 vols. (Revised edition), Loeb Classical Library, Cambridge, 1978. See *Aeneid* III. 64.
- 21) Michael Oakley (tr.): *Virgil's Aeneid*, Everyman's Library, London, 1964, p. 46.
- 22) John Dryden (tr.): *Virgil's Aeneid*, Harvard Classics, New York, 1937, p. 130.
- 23) Furness (ed.): *op. cit.*, see Note 61. on p. 144.

池 上

- 24) *ibid.*, see Stow's *Annales*, p. 503 quoted by Furness.
- 25) *ibid.*, see Note 123. on pp. 193-194.
- 26) M. W. Croll and H. Clemons (ed.): *Lyly's Euphues*, New York, 1964, p.35 with Note 6. & p. 208 with Note I.
- 27) Compare Milton's *Pensero* 35, and also remember that Furness says Mr. Warton has suggested in his edition of Milton's Poems that the meaning (of Cypress) here is 'Let me be laid in a shroud made of Cyprus, not in a coffin made of Cypress wood.
- 28) Fairclough (tr.): *op. cit.*, Aen. II. 714.
- 29) *ibid.*, III. 680.
- 30) *ibid.*, III. 64.
- 31) *ibid.*, VI. 216.
- 32) Allardyce Nicoll (ed.): *Chapman's Homer*, 2 vols., London, 1957. See Vol. I. *Iliad* XXIII. 3-8. on p. 454.
- 33) *ibid.*, XXIII. 121-123. p. 457.
- 34) オヴィディウス (田中秀央・前田敬作訳) 『転身物語』, 人文書院, 1980年, 66頁。
See *Metamorphoses* X. 106 ff.
- 35) In *Britannica*: *op. cit.*
- 36) James G. Frazer: *The Golden Bough*, New York, 1935, p. 111. (永橋卓介訳『金枝篇』(1)―(5), 岩波書店, 1986年)
- 37) *ibid.*
- 38) *ibid.*, p. 115.
- 39) Fairclough (tr.): *op. cit.*, Aen. III. 19-48.
- 40) Maarten J. Vermaseren: *Cybele and Attis*, London, 1977. (小川英雄訳『キュベレとアッティス——その神話と儀式——』, 新地書房, 1986年, 217-218頁。) ドルドーニュ地方の東, ペリグー (ヴェスンナ) 出土の祭壇の右側面のアッティス像, 写真も添えられている。
- 41) David Watson (tr.): *The Works of Horace (A New edition)*, 2 vols., together with the original Latin, New York, 1976. See *Ode* II. xiv. 23. with English Note 9. on p. 198 in Vol. I.
- 42) In *Britannica*: *op. cit.*
- 43) 小林秀雄「ゴッホ」『小林秀雄全集第十巻』, 新潮社, 1974年, 153頁。小林秀雄訳ゴッホの書簡 No. 604。
- 44) *ibid.*, 148頁。書簡 No. 594。
- 45) *ibid.*, 153頁。書簡 No. 604。